

## 離婚の苦を乗り越えて今、 「娘を授けてくれてありがとう」。

鳥取教会 中澤成衣さん

中澤成衣さんは、幼い娘を抱えて離婚した。原因は、身勝手な理屈でパチンコにのめり込む夫にあった。我慢の限界で実家に戻り、フルタイムで働き始めたが、娘が気管支炎を患い、入退院をくり返すようになってしまふ。娘に会いたがる夫と対面させると、とてもうれしそうな笑顔の二人。そして、二人の髪の色がそっくりなことに気づく。以前知人から「夫を否定することは、娘のいのちを否定するのと同じ」と言われたことを思い出す。夫からは、「二人には迷惑をかけた」「父親らしいことをしたい」と言われ、その変化に、怒りや憎しみの感情が薄まり、「娘を授けてくれてありがとう」と感謝を告げた。中澤さんは離婚後、「一人で何とかする」と意地を張って生きてきたが、実際は家族や仲間、そして夫にも支えられ、生かされていることに気づく。そう思えるいまは、肩に力を入れて生きていたときより、うんと幸せで心穏やかに笑顔で過ごしている。



## 偏った見方を越える

法華経の「提婆達多品」に、「私が仏の悟りを得て人びとを救えるのは、すべて提婆達多という善き友のおかげです」という一節があります。自分を敵視して殺そうとまでした提婆達多のことを、釈尊が感謝の思いをこめてサンガに伝える重要なくだりです。

釈尊は、提婆達多からの非難や攻撃という厳しい現実直面するなかでもまた、心を天にのぼらせて、広く大きな心で提婆達多と向きあつたのだと思います。すると、その瞬間に「自分を害する悪い人」と見る自己中心の心が、スッと仏性を信する大きな心へと切り替わり、すべてに合掌・礼拝せずにはいられなかった——そういう心の切り替えをうながしてくれた提婆達多は、釈尊にとって「善知識」以外の何ものでもなかったといえるでしょう。「みんな仏性」という見方に立てば、偏った見方で人を傷つけたり、争ったりすることはありません。人を批判する前に、「そうか、あの人も仏性なのだ」と思い返すきっかけがあれば、偏った見方をして悩むこともないのです。ただ、誤解されやすいのですが、仏性を信じるというのは、相手のいいところを見ることではありません。相手を、まるごと仏性として拝むことです。すべての仏性をひたすらに信じるなかで、私たちは矛盾や葛藤とも向きあい、人として成長していくのだと思います。

## 立正佼成会